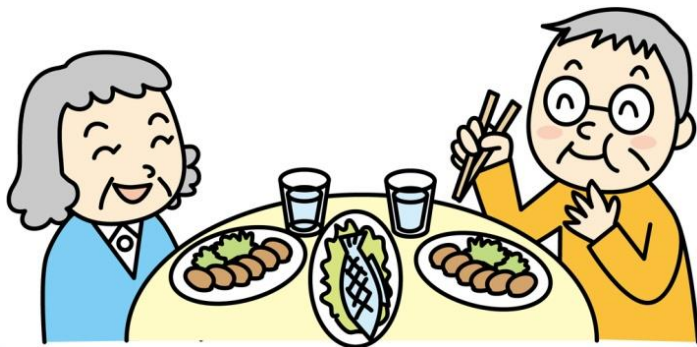


## 口は健康のもと Vol.210

### 認知症と歯の関係 歯の減少でリスク増

以前は認知症の発症と口の中の環境とは無関係と思われていましたが、最近の研究で口の中の歯の数が減少することなどにより、認知症を発症するリスクが高くなることがわかってきました。特に、アルツハイマー型認知症発症の割合が向上することが知られています。また、十分に物が噛めない人は、なんでも噛める人に比べ、認知症になる危険性が1.5倍も高くなることが報告されています。つまり、認知症の予防としてしっかり噛める歯を残すことが大切なのです。歯を抜かなければならない原因としては、歯周病だけではなく、高齢者に多くみられる根面う蝕と呼ばれる虫歯も近年問題視されています。根面う蝕は歯周病などで歯茎が下がった部分に生じる虫歯で、この虫歯は歯茎周囲を帯状に覆うように広がっていきます。高齢者になると若い人に比べ唾液の量が減り、口の中が乾きやすくなることも虫歯の進行を早める原因となります。根面う蝕を放置した結果、たった1か月で歯がボロボロになってしまったという報告もあります。このように、根面う蝕を放置していると歯が無くなるだけでなく、日常生活に支障をきたす認知症などの疾患を引き起こす恐れもあるのです。



奥羽大学歯学部附属病院

総合歯科 教授 山田嘉重

